

不登校児童生徒に対する理解と支援に関する研究

本研究は、不登校を従来の分類と異なる観点から分類することにより、不登校の理解を促進し児童生徒への対応をより精密にすることを目的とした。分析対象は、教育相談室での不登校相談事例である。これらの事例を「学校文化と自我とのかかわり」という視点で分析した結果、「過適応的」なもの、「不適応的」なもの、「未適応的」なもの、「反適応的」なもの、「非適応」的なもの、その他に分類された。従来の分類では、理解や支援の在り方に十分な示唆を与えられることが少なかったタイプの不登校について理解や支援に関する示唆を得られた。

< 検索用キーワード > 不登校 分類 学校文化 適応
悩まない不登校 理解 支援 教育相談

研究者

総合教育センター相談部教育相談研究室長

村上 慎一（平成19年度研究）

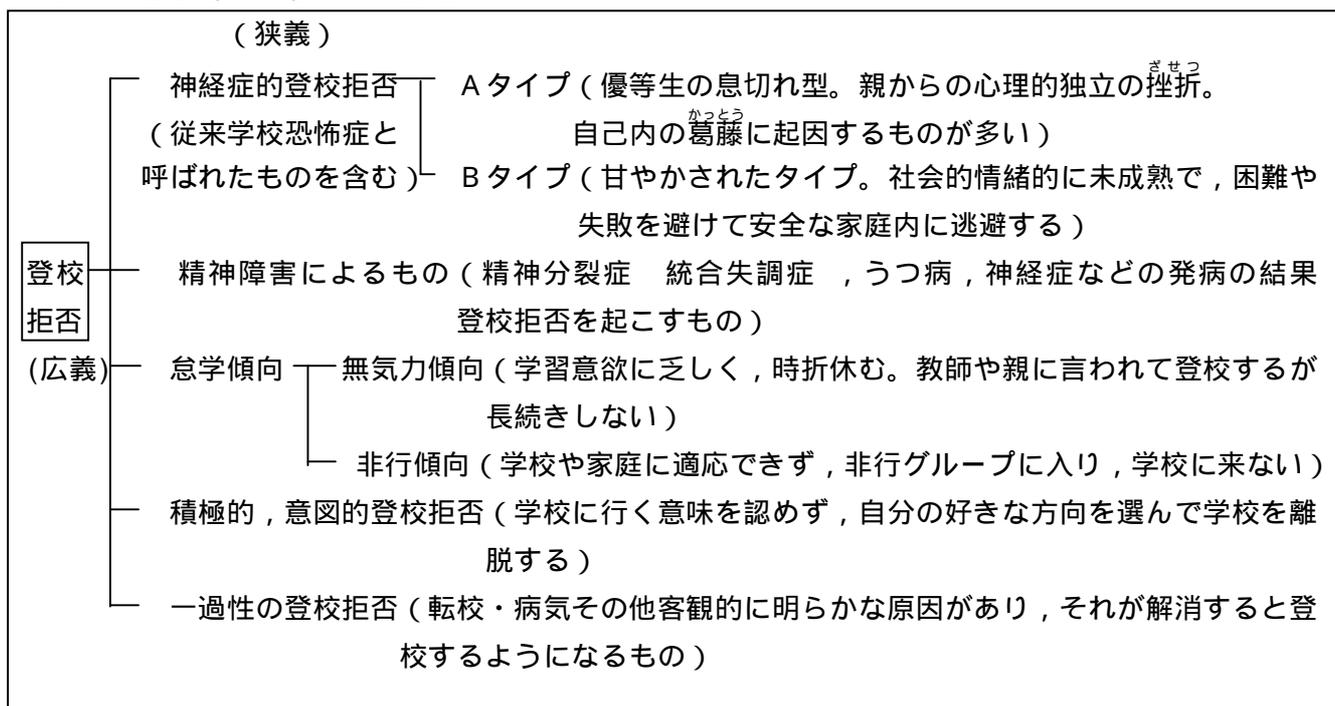
1 はじめに

不登校概念は独立した疾患概念ではなく、ありふれた一つの状態像である。精神科医の齊藤（2006）は、不登校を「学校という外的環境と家族内環境との間を揺れ動く児童・思春期の子供に特有な内的葛藤の一表現形態」と考えるべきであるとした上で、不登校を子供の「学校活動への適応及びその破綻の様式」により4類型を作成し、臨床的に活用している。「過剰適応型不登校」「受動型不登校」「衝動型不登校」「混合型不登校」の4類型である。また、石川（2005）は、児童臨床20年の経験から現代の不登校を6類型化している。「医療型不登校」「慢性型不登校」「開放型不登校」「校内型不登校」「校外型不登校」「非行型不登校」の6類型である。このような分類が必要であるのは、不登校がありふれた状態像でありながら、背景が異なり、それに応じて経過がそれぞれ異なるからである。また、それぞれ背景や経過が異なりながら、何らかの共通性が見いだされる群が存在するからである。多くの研究者により分類が試みられていることは、それぞれの類型に応じた支援の在り方を考え、子供個別の問題に当たることが有効であることを示唆している。

2 研究の目的

不登校分類の仕方は、教育機関か治療機関かで異なったものとなり、扱う不登校のケースによっても違ったものとなる。不登校に対する公的機関の代表的な分類としては、文部科学省の分類と教育相談所の分類がある。文部科学省は、30日以上連続で欠席した不登校児童生徒を“不登校状態となった直接のきっかけ”により「本人の問題に起因」「家庭生活に起因」「学校生活に起因」に分類している。この分類は、統計処理を目的としており、幾分患者探しの目的である。これに対し、教育相談時に有効性をもつ分類としては、小泉（1973）による分類が知られている（表1）。

表1 小泉（1973）による分類



小泉の分類では、「神経症的登校拒否」を狭義の「登校拒否」とし、Aタイプ（優等生の息切れ型）とBタイプ（甘やかされたタイプ）を挙げる。小泉の分類が今日まで一定の有効性を保っているのは、学校や教育相談所で出会う教育相談的援助を必要とする不登校の多くが「神経症的登校拒否」に含まれ、A、B両タイプを想定すればおよそ理解できてきたからである。「神経症的登校拒否」の2タイプは、「親からの心理的独立の挫折」「社会的情緒的に未成熟」のように個人の発達^{そと}の在り方と不登校行動のかかわりという観点から分類されている。しかし、表の から の不登校については、これとは異なる基準で分類されているため、理解・支援に齟齬^{そご}をきたす可能性があった。また、学校や教育相談所で出会う不登校も多様化し、「神経症的登校拒否」に当てはまらないものもある。そこで、不登校行動が本来、学校が伝えようとする社会に支配的な文化、価値観とのかかわりから生じるものであることを考慮し、この文化への自我のかかわりの在り方という基準により不登校事例を見直すことにした。本研究は、一貫した基準で新たな分類を試み、今日的な不登校をも含んだ不登校行動の理解と支援を促進することを目的とする。

“学校文化”とは

“学校的な価値観”について河合（1992）は次のように述べている。「日本人すべてが『勉強ができる子はえらい』という一様な価値観」に染まっており、「日本人の一様な価値観として『素直なよい子』という理想像」があり、それは「目上の人の言うままに従う」子を意味している、さらに、日本では「すべてが包まれたひとつの『場』の平衡状態を維持することが大切」で「場の方がまず個よりも先行」（母性原理）している、と。河合の言うように、日本の学校に支配的な“学校的な価値観”は大きく二つの意識で構成される。一つは、努力は成績に反映し、学習成績による序列が人格のよしあしの判断材料にもなり、将来を決定していく、それは正当なことなのだという意識である。もう一つは、“みんな同じ”でなければならない、という絶対的な平等を求める意識である。序列化と平等という一見矛盾するものが無理にも結び付けられているのが、日本の学校の現実であり、この現実を作り出し推進している大人の言うことに素直に従う子供が“よい子”である。

本研究では、“みんな同じを建前とする同調圧力の強い子供集団を、努力の結果としての学習成績で

序列化することを良しとする価値観”が学校の文化を決定付けていると考え、これを“学校文化”として定義した。

3 研究の方法

(1) 対象

愛知県総合教育センター教育相談室で筆者が面接相談を行った 165 事例のうち、不登校若しくは不登校傾向の児童生徒の 123 事例（平成 16 年 4 月から平成 19 年 6 月までの面接相談事例）を分析の対象とした。

対象とした不登校児童生徒の校種別内訳は、小学校 4 例，中学校 15 例，高等学校 104 例である。筆者の面接相談は，高等学校生徒が多数を占める。

(2) 分析の方法

対象児童生徒本人又は保護者との面接相談の記録より，123 事例の不登校行動のきっかけを読み取る。“学校文化”に対する不登校児童生徒の態度を確かめ，この観点で 123 事例を分類し，各類型の出現頻度を確かめる。

4 研究の内容

(1) “学校文化”へのかかわりによる分類

“学校文化”とのかかわりの在り方という視点で 123 事例（小学生 4 例，中学生 15 例，高校生 104 例）の不登校事例をとらえ直したところ，次の から のように分類された（表 2）。

表 2 学校文化へのかかわりによる分類

学校文化に“過適応的”な側面の見られる不登校	5 例（4.1%）
学校文化に“不適応的”な側面の見られる不登校	80 例（65.0%）
学校文化に“未適応的”な側面の見られる不登校	17 例（13.8%）
学校文化に“反適応的”な側面の見られる不登校	8 例（6.5%）
学校文化に“非適応的”な側面の見られる不登校	9 例（7.3%）
～ のいずれにも当てはまらない不登校	4 例（3.3%）

(2) 各類型の特徴と支援のポイント

各類型について事例を挙げながら述べ，類型の特徴と支援のポイントをまとめる。

学校文化に“過適応的”な側面の見られる不登校

学校文化に適応的でありすぎるあまり，学校的な価値観の抱える矛盾がそのまま本人の問題のようになり，ついには学校に行くことができなくなるタイプ。事例数としては多くはなく 123 例中 5 例（すべて高校生）を数えるに過ぎない。進学校と言われる高校に比較的多い。学業成績を重視する価値観に“過適応的”な者（4/5 例）だけでなく，協調的人間関係を尊ぶ価値観に“過適応的”なあまり不登校に陥る場合（1/5 例）もある。

事例 A - 高校 3 年女子 《もう学校に行きたくありません。友達とも全然うまくいかないし...。（どうしたの？）私は，この夏休みに死ぬほど勉強しました。ご飯を食べたり，お風呂に入ったりという時間以外は，ずっと勉強しました。一日 10 時間以上は必ず毎日やってきました。でも，夏休み後に受けた模試の成績がよくなって...。前より悪くなってしまったくらいなんです。こんなに一生懸命やったのに...。（高い目標に向かって，一生懸命努力した，だから，成績が上がって当然と思ったんだね）学校の先生たちは，いつもそうしなさいって言っていますよ。（そういうことが大事なのだと言うよね）

高校の先生だけじゃないですよ。小学校の先生も，中学校の先生も，そう言っていました。目標を決めて，努力することが大切だと。そうすれば，きっと報われるって。(最後の“きっと報われる”っていうところは，本当なの？報われることもあるし，あまり報われないこともあるというのが本当じゃないの？)私，もうこれ以上努力できません。(そういうこと言っているんじゃないくて，あまり結果を気にしない方がいいのでは？結果は，よいことも悪いこともある，努力の量に比例するわけではないって，考えられない?)・・・。》

この後，更に話を続け，努力しただけ必ず結果がついてくるといふ，現実にはありえないことを信じている生徒の思い込みを，少しずつ変えるように努めた。この生徒は，二週間ほどで学校に復帰して少しずつ元気になっていった。

学校文化に“過適応的”な側面の見られる不登校の特徴

努力したら思いどおりの結果に結び付いたなど，自らの信念が強化される経験をもつ。
自分の信念と違う現実に絶望し不登校に陥ると，容易に立ち直れないことが多い。
完全主義的傾向が強く，努力を停止し無気力になり，“うつ”に陥り長期化しやすい。
学習に代わる対象（パソコン，読書など）を求めて一時的にのめり込むことがある。

支援のポイント

落ち込みが激しくならないよう，できるかぎり早期に対応する。
傾聴共感中心の支持的な支援より，イラショナル・ピリーフ（間違っただけの思い込み）の転換を図る
認知行動療法的な支援の方が奏功しやすい。

学校文化に“不適応的”な側面の見られる不登校

学校文化に適応しようと努力しても，学校のもつ何らかの文化に適応しきれないにもかかわらず，学校というシステムを忌避しきれぬままに，学校が重荷になり，ついには学校に行くことができなくなるタイプ。不登校事例の大半は，このタイプであり（80/123例），典型的な不登校タイプと言える。学習にかかわっての不応（33/80例）よりも，友人関係，対教師関係など学校での人間関係にかかわっての不応（47/80例）の方が多い。

事例 B - 高校 1 年男子（母親の話）《思い返してみれば，入学したころからあまり元気がありませんでした。私の方は，地元では一番の進学校に入れたということで，とてもうれしかったですね。部活も入って，とりあえずは順調にやりはじめたように見えたのですが…。最初のテストのあたりから，特に結果が返ってくる辺りからは，極端に元気がなくなっていきました。全くの下位ではなかったと思うのですが，それでは満足できなかったのでしょうか。「部活の子たちは，みんなよくできる。ボクだけがこんなにバカで，どうしようもない」というようなことを言っていました。顔色も悪くなり，食欲も落ちていきました。だんだん朝起きるのが遅くなっていったのです。私の方は，気になるものですから何度も何度も起こすのですが，起きてきません。布団をかぶって寝ています。それでも無理に起こそうとすると，「おなか痛いから，今日は学校に行けない」と。それが何日も続きました。話が前後しますが，休み始めたころ，遅刻して行ったことがあって，その時，担任の先生に問答無用の勢いで，頭ごなしにしかられたこともショックだったようで…》

学習成績が低下することでセルフエスティームが急激に落ち，無気力状態にいるところに，教員の叱責しつせきが加わって，学校に行くのが心底嫌になる。親は本人の不登校を許せず，学校へ行かせようとする。登校に対する圧力を口でははね返せない子供は，今度は身体症状を訴えて，自分の苦しみに理解を求める。このようなケースは，本当によくある。また，学校での人間関係が思うようにならず，活動への意欲が低下して，登校を渋るようになるケースも，劣らず多い。人間関係にかかわるケースの

場合 過去のいじめ被害体験をひきずっていたり、いじめに悩んでいたりする場合は相当数ある(11/47例)。

学校文化に“不適応的”な側面が見られる不登校の特徴

強迫的であり、内面で“登校”意識が巨大なものとなり、他のことが考えられない。自分の苦しさを理解してもらいたいという気持ちが強く、身体症状が出ることもある。昼夜逆転し、パソコンのゲーム、ネットなどで苦しさから逃げようとすることが多い。家人が強く登校を迫り、家にいても休まらないと暴力的行為に至ることもある。

支援のポイント

学校的な価値観と自分の本音との間で板ばさみになり苦しいということ、共感的に理解する他者の存在が重要である。

登校しないと将来困ったことになるなど、脅しめいた言葉を掛けない。指示・指導より支持的な支援を優先する。

可能な環境調整は行い、どう考えどうするかは本人に選択させることを中心とする。

学校文化に“過適応的”な側面が見られる不登校と学校文化に“不適応的”な側面が見られる不登校とは、類似性があり、どちらともつかない中間的な不登校もありうる。

学校文化に“未適応的”な側面が見られる不登校

学校文化に“未適応的”な側面が見られる不登校とは、学校文化に適応しようという本人の意思が、家庭環境的要因などで阻害されているタイプをいう。学校に行くか行かないかという問題の前に片付けるべき問題があり、学校どころではないので学校に行けない、行かないタイプともいえる(17/123例、うち小学生2/17例、中学生3/17例、高校生12/17例)。筆者は、小学生のケースを扱うことが少ない(4/123例)が、小学生の事例の2/4例がこのタイプである(他2例は“不適応的”)。一般に小学校低学年の不登校にはこのタイプが多いと言われている。本研究では事例数が少ないものの同様の傾向がうかがわれる。適応以前の問題は多様だが、親との関係の問題が多い。次に挙げるのは、母子分離不安型の不登校と言われてきたものである。

事例C - 小学2年男子 (母親の話)《小学校低学年にしては体が大きい子です。学校での勉強は、よくできる方だと思います。友達は、…。クラスの友達とか同じくらいの年齢の男の子とはほとんど遊びませんね。遊びたがらないんです。父親はしかるばかりで、子供は怖がっています。たまに、機嫌がよいときは、遊びに連れ出してくれるんですが、帰ってくるまで機嫌がよいということは、ありません。子供にいろいろしてやっているのに、子供がうれしそうな顔をしないことが気に入らないようです。2年ほど前に妹が生まれたのですが、その妹をよくいじめるので困っています。半年ほど前からは、ときどき学校を休むようになりました。今は、学校に行く日の方が少ないくらいです。(学校に行っていないときは何をしていますか?)一人でゲームをやっているか、おもちゃで遊んでいる。妹がいると、妹が遊ぶのをじゃましたり、ぶつたりすることもある。そういうときは、私が妹の方を守ります。妹は、まだ、小さいものですから。学校に行かせるには、どうしたらいいでしょう?》

母親の悩みは、息子がなぜ学校に行かないかということだが、学校に行くか行かないかは、副次的な問題と言ってよい。問題の本質は、大切な母親の愛情を妹に奪われたように感じ、だれも(特に母親が)自分や自分の気持ちを大事にしてくれないでは、学校なんか行っても何の意味もないと感じている子供の気持ちをどうしたらいいか、というところにある。この分類に入るケースでは、親に登校不登校の問題が第一の問題と意識されている間は、子供の問題は解決しないことが多い。また、この分類に属するのは、小学校低学年に多い母子分離不安型の不登校ばかりではない。青年期におい

ては、両親の夫婦不和が不登校のひきがねを引きやすい。離婚に至りそうなほど不仲な両親の関心を自分にひき付け、一緒に問題解決に当たらせることで破局を回避させようとすることを意図しているかのような不登校は、このタイプに分類される。

学校文化に“未適応的”な側面の見られる不登校の特徴

学校へ行く行かない以前の、本人にとっては登校不登校よりも重大な問題を抱えているため、学校に行けない理由が本人には明確に意識されていないことが多い。

親子関係中心に家庭内の人間関係につまづいたり、傷ついたりしていることが多い。

周囲からは、甘えている、あるいは、怠けているようにしか見えないことがある。

支援のポイント

子供にとって登校以前の重要な問題は何であるかを、親や周囲の大人と考えていく。

禁止・命令より、登校より大事なことは何であるか、そこにある本人の苦しみを理解することを中心とし、安心感をもてる関係・場の構築を考える。

母子分離を図るときは、行動療法的な支援が有効な場合も多い。

学校文化に“反適応的”な側面の見られる不登校

学校の文化に反発を感じるあまり、学校というシステムを壊そうという方向に働いたり、学校を忌避して別の所に居場所を求めたりし、学校には行かないタイプ（8/123例）。皆のために我慢せよということで、規則や決まりを些事にいたるまで徹底する一方で、学習成績のよしあしを人格の評価に結び付けてしまう、学校の中心的な文化や、その結果としての学歴信仰に、反社会的行動で反旗を翻す子供たちもいる。次の事例は、母親が語っている。この家庭では、家庭内も学校と同じ価値観が支配的であった。

事例D - 高校1年男子 《1年生の2学期からほとんど学校に行っていません。規則が細かくて、宿題がたくさん出ることで有名な学校なんです。入学当初からやる気がなさそうでしたが、先生にはときどき反発しながらも、何とかやっていました。テストの点はなかなか良くて、私は励ましていました。そういう一切のことが嫌だったのでしょね。「学校なんかつまらない」とか「行っても仕方がない」と言うようになり、勝手に学校を休むようになりました。私がそれをひどくしかった時には、反発して暴言を吐いて…。今では、家に帰ることも少なくなってしまう。友達のを泊まり歩いて、パチンコ屋に入り浸り、バイクを乗り回しています。深夜徘徊で警察に捕まったこともありましたが、警官にも毒づき、警官もあきれていました。最近では、シンナーも始めたようで…。学校のことを切り出すと、大声で私をののしるだけで、とりつくしまがないんです。…》

母親は、学校生活への復帰が関心の中心だったが、子供の方は、学校にも母親にも強い嫌悪感を抱いていた。良い成績を求める母親の対応が、学校の文化に強い嫌悪感をもつ子供の心情にふさわしくなかったと気付いてもらうことから、相談がスタートした。

学校文化に“反適応的”な側面の見られる不登校の特徴

学校・教師・校則・テストなどに、敵意を抱いていることが多く、教師や親には毒づく。否定される経験が積み重なり、セルフエスティームが低く、無気力なこともある。

学校でも家庭でも自分の気持ちを分かってもらえないように感じており、“寂しさ”を抱え込んでいるため、学校・家庭以外の人間関係を求めることが多い。

“寂しさ”やストレスを反社会的な行動で表現し、否定され、悪循環に陥りやすい。

支援のポイント

禁止・命令から入らず，“寂しさ”を理解し，信頼関係の構築を考える。
否定を中心とせず，セルフエスティームが向上するようなかかわりを中心とする。
本人のもっている不平・不満や不安に焦点化して，話を聴く。
登校より自己の生活の立て直し，充実感，達成感ある生活を相談の第一目標にする。

学校文化に“非適応的”な側面が見られる不登校

ここまで分類した不登校は，何らかの対立や強い葛藤^{かつとう}の末の不登校ということができる。しかし，馬場（2002）が言うように，1990年ごろから不登校は変わりはじめ，ほとんど葛藤^{かつとう}の感じられない不登校が増えている（9/123例）。“悩まない不登校”とか“明るい不登校”と呼ばれる。次の事例は，父親が話している。

事例E - 高校2年男子 《高校2年生になってパタリと学校へ行かなくなりました。（どうしたんでしょう？）それが，全然分からなくて困っている。学校の勉強の成績は，ごく普通でよくも悪くもない。赤点を取るようなこともなかった。部活は，初め少しだけやっていたけど，すぐやめた。帰宅部です。友達がいなかというとも，そうでもない。確かに友達は多くはないけれど，家に遊びに来る程度の付き合いの子は，何人かいる。先生に「何かあったのでしょうか」と尋ねても「これといって，何もなかったと思う」と。一番分からないのは，本人が悩んでいる様子がないこと。心配しているのは，親の方で，本人はあまりにも自然に振舞うので訳が分からない。親とは，自然に会話をする。学校とか進路とかいう話になると黙ってしまうということはある。前に「学校になぜ行けないか？」と聞いたら「行こうと思えば，行けるよ」と答えた。でも，行かない。全く何を考えているのかわからない。（家で何していますか？）テレビを見たりもするけれど，ほとんどの時間パソコンでゲームをしています。…》

学校へ“行く理由”が消失している。“行くべき理由”を強く感じているのは，親の方で，子供は，“学校に行くべき理由”などを本気で信じている親を疑っている。学校を絶対と信じてきた親や社会の在り方に，“悩まない不登校”によって異を唱えているとも言える。

学校文化に“非適応的”な側面が見られる不登校の特徴

学校に行く理由がないから行かないということで，葛藤^{かつとう}が弱い。
家人との関係は，親の態度にもよるが，極端に対立的な例は少ない。
気ままに好きなことをして，怠けているように見える。
友人関係は途絶えていないことが多いが，人間関係に忌避的な態度を取る例もある。

支援のポイント

学校に行くことを無理強いしない。
家にいるのではなく，学校に行った方が楽しいことはないかなど，学校に行く方が良い理由を本人と一緒に考えるようにする。
本人に学校に行く理由が見付からなければ，“学校に行かない，充実した人生”について考えるようにした方が現実的，建設的と考えるようにする。

から のいずれにも当てはまらない不登校

精神障害やアスペルガー障害などの発達障害による，人間関係のつくりにくさ，集団行動へのなじみにくさが不登校の理由を形成することがある（4/123例）。当然のことながら，その場合は，個々の発達の在り方に応じた対応が求められる。

5 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

学校の文化、価値観に対する在り方をキーにして、不登校を5タイプに分類して検討した。事例AからEは、いずれも相談の入口や入口近くのものである。ここから先の展開は、多種多様である。葛藤が身体症状に現れたり、病的なものとして現れたり、病気へと移行していったりすることもあれば、家庭内の人間関係、学校での人間関係などの調整が功を奏したり、本人が成長したりすることで出口に向かうこともある。なかなか進展しなかったり、後退したりすることもあれば、すぐに事態が改善することもあるし、少しずつ変化していくこともある。そこには、個々それぞれの資質、個々の発達^{なつよう}の在り方、本人を取り巻く環境、本人に起きてくる出来事が複雑に絡み合う。それゆえ、それぞれへの対処の在り方は、当然それぞれで異なったものになる。しかし、学校制度というシステムを社会が作り出し、そこに支配的な文化が生じていて、学校が社会にその価値観を還元していくような構造がある以上、それぞれの不登校がどれだけ異なった様相を見せたとしても、そこには“学校文化”に対する子供たち、子供を取り巻く大人たちの思いが反映されている。

ここで、再び小泉(1972)の不登校分類を振り返り、本研究の分類と比較し考察したい。小泉の分類をみると、「神経症的登校拒否」「精神障害によるもの」は、いわゆる病態水準による分類であり、「怠学傾向」「積極的、意図的登校拒否」は、学校(学級、学習、教師など)への態度による分類である。また、「一過性の登校拒否」とは、客観的理由(外的要因)による分類となっており、分類の基準が一貫していない。基準を「学校文化へのかかわり」と一定にした新たな分類と照合すると、「Aタイプ優等生の息切れ型」には、“よい子”でいらなくなって起きる点で共通する、「学校文化に“過適応的”な側面の見られる不登校」と「学校文化に“不適応的”な側面の見られる不登校」との大半が含まれる(表3-)。「過適応的」タイプと“不適応的”タイプは、一緒にしない方がよいと考える。支援のポイントに示したとおり、両者では支援の在り方に差異が生じるからである。次に「学校文化に“未適応的”な側面の見られる不登校」の一部には、「Bタイプ甘やかされたタイプ」が含まれる(表3-)。しかし、“未適応的”タイプと「Bタイプ甘やかされたタイプ」とが完全に一致するわけではない。“未適応的”タイプには、不登校により、不和である両親のよりを戻させることを図ったかのようなケースが含まれている。このような不登校への理解も子供への支援も大切であるが、小泉の分類では、ぴたりと当てはまる分類がなく理解(支援)にぶれが生じる可能性がある。また、新たにした分類の「学校文化に“反適応的”な側面の見られる不登校」は、小泉の分類の「怠学傾向-非行傾向(学校や家庭に適応できず、非行グループに入り、学校にこない)」にほぼ一致する(表3-)。ただし、留意しておいた方がよいことがある。いわゆる「非行」は「怠学傾向-非行傾向」の不登校児童生徒からだけ生じるとは限らない。岡田(2005, A)は、非行について『集団回避型』ともいえる非行少年が凶悪な事件に多い」ことを最近の特徴としている。岡田は、小泉が言う「学校や家庭に適応できず、非行グループに」入るような“反適応的”タイプの非行少年が非行の中心にはいるが、「回避的で現実感を欠いた子供たちが、非行において一つの勢力分野を形成しつつある」とする。非行を起こす児童生徒が不登校とは限らないが、新分類の“非適応的”タイプをはじめとした他タイプからも非行が生じていることが示唆される。非行という行動だけを見て、小泉のいう「怠学傾向-非行傾向(学校や家庭に適応できず、非行グループに入り、学校にこない)」に分類し対応することは適当でない。さらに、新分類における「学校文化に“非適応的”な側面の見られる不登校」は、小泉の分類の「怠学傾向-無気力傾向(学習意欲に乏しく、時折休む。教師や親に言われて登校するが長続きしない)」と「積極的、意図的登校拒否(学校に行く意味を認めず、自分の好きな方向を選んで学校を離脱する)」がおおよそ当たる(表3-)。小泉の分類では別に分類

されているが、本来これは一つのことを背景とするのではない。すなわち「学校に行く意味を認めない者のうち、ある者は「自分の好きな方向を選んで学校を離脱する」道を取るが、「好きな方向」の見付からぬ者や「学校を離脱」できない者が「学習意欲に乏しく、時折り休む」ようになったり、「登校するが、長続きしな」くなったりするのではないかということである。このタイプの不登校について、精神科医の町沢（2005）は、「『気力がわからない』『学校が面白くない』といったように、さしたる理由もなく学校に行かない、アパシーあるいは無気力になっている子供が多い」ことを最近の不登校の特徴とし、このタイプは「きわめてのん気で元気な生活が特徴」で不登校であることの焦り、深刻さがないと述べる。その上で、このタイプには、登校の促しより「学校に行かなくても、この子はどうやって生きていけるのか」を本人と考える方が意味があるとしている。最後に、精神障害・発達障害が先行する「 から のいずれにも当てはまらない不登校」には、小泉の分類の「精神障害によるもの」が含まれる（表3 - ）。ただし、精神障害には、不登校の原因なのか結果なのか背景なのか判然としないものが多く、不登校に先行するものばかりでない。新分類の は、はっきり不登校に先行するものに限定した（アスペルガー障害の二次障害など）。岡田（2005, B）は、不登校とかかわる精神疾患として「適応障害」「身体化障害」「気分障害」「高機能広汎性発達障害」「パーソナリティ障害」「コミュニケーションの障害」「反抗挑戦性障害・行為障害」「統合失調症」「睡眠障害」などを挙げており、注意を要する。精神疾患への適切な対応が不可欠であることは論をまたないが、 から までの不登校が精神疾患として発症しないように考えることが重要であると考えられる。

表3 小泉（1973）の分類と本研究の分類の対照

小泉の不登校分類	本研究の不登校分類
神経症的登校拒否 Aタイプ（優等生の息切れ型）	学校文化に“過適応的”なタイプ 学校文化に“不適応的”なタイプ
神経症的登校拒否 Bタイプ（甘やかされたタイプ）	学校文化に“未適応的”なタイプ
怠学傾向 - 非行傾向	学校文化に“反適応的”なタイプ
怠学傾向 - 無気力傾向 積極的，意図的登校拒否	学校文化に“非適応的”なタイプ
精神障害によるもの	～ のタイプに含まれないもの
一過性の登校拒否	なし（内的要因の不登校に限定）

(2) 今後の課題

不登校問題を考える時には、個々の違いにばかり目を向けて対処するのではなく、問題を取り巻く人々それぞれの学校の文化に対する思いを考慮に入れて対処することが求められることを明らかにしてきた。不登校児童生徒には個別性が存在すると同時に、確かな視点をもつことによりある種の共通性が見出される。共通性に応じた支援の在り方を大枠で考え、子供個別の問題に当たることが大切である。新分類は、不登校児童生徒の理解の在り方に一定の視点を提供し、よりの確な支援を可能にするものとして構想した。分類の基準を一貫させ、小泉（1973）の不登校類型の統合・分化を行った。それは、不登校という状態像に対しての“見立て”（理解）の仕直しを意味している。“見立て”の仕直しをすることは、支援を変える契機ともなりえると考えてのことである。本稿に、各類型の「特徴」として示したところを更に精密にすることで、不登校児童生徒に対する正確な理解を促進したい。また、「支援のポイント」として示したところには実践を通して改善を加え、よりの確な支援を進めたい。

引用文献

- 1 石川瞭子「不登校の子の『疲れ』に目を向ける」『児童心理』12月号臨時増刊
金子書房 2005 p32 , p33
- 2 岡田尊司『悲しみの子供たち - 罪と病を背負って』集英社 2005, A pp18 - 37
- 3 岡田尊司『子供の「心の病」を知る』PHP 研究所 2005, B pp316 - 317
- 4 河合隼雄『子供と学校』岩波新書 1992 pp2 - 30
- 5 小泉英二編『登校拒否 - その心理と治療』学事出版 1973 p16
- 6 齊藤万比古『不登校の 児童・思春期 精神医学』金剛出版 2006 pp23 - 25
- 7 馬場謙一編『学校臨床心理学』放送大学教育振興会 2002 p111
- 8 町沢静夫『日本人に合った精神療法とは』日本放送出版協会 2005 pp241 - 242